

冬桜 作・風間銀灰

木枯らしが吹き抜けていった。足元の落ち葉が、乾いた音を立てて転がっていく。晩秋の日光は気短で、名残りの薄明りが、辺りのものを全て影のようにしていた。その中でたった一つだけ、ゆっくりと動いていく影があった。男が一人、黄昏の通りを歩いていた。

辺りにはほとんど人氣がなかった。大概の者は、帰宅して家族に囲まれて、夕食の箸を取っている頃だろう。道沿いに並んでいる長屋の灯、賑やかな話し声、煮炊きの煙がそれを伝えている。男は、以前は、そんな家々の情景を想像し、幽かな寂しさを覚え、そしてそんな自分を恥じていたものだった。だが、今は...飯の匂いをかいでも、空腹さえ感じない。

また風が吹いて、男は思わず身震いした。震えたのは、粗末な着物のためだけではなかった。彼は痩せていた。そして胸に病を飼っていた。冷たい風が吹く度、その厄介者は暴れるのだった。通りに、男の咳込む声が響いた。そのときだけ、蒼白い頬に僅かに血の気が差した。そつと口を拭くと、彼は再び歩き出した。

男は、まだ若かった。その若さ故に、絶望感も深かった。絶望は暗いのではなく乾いていた。足元の落ち葉のように。

それがどうしたというのだ？この大都市、江戸には、この俺のように、主も、共に暮らす家族も、そして健やかささえ失っている者が、腐るほど居る。その中の一人が欠けたとて、何も変わらないし、意味すらもない。

足が枯れ葉を踏んだ。乾いた葉は粉々に碎け散って、風にさらわれていった。幼い頃寺で見た、一握りの灰のように。男は再び身震いした。...今度は寒さからではなかった。

やがて、ぼつんと一軒の庵の灯が見えてきたので、彼は思わずほっと息を吐いた。医師の家にたどり着いたのである。

一の二・三

医師は、厳つい顔の中老の男で、病になる以前からの知り合いだった。十二、三くらいの孫娘と二人で暮らしている。腕は確かで、患者からの評判も悪くなかった。だが、その腕でも、絶望している男を治癒するのは困難だった。

診るのを終えると、医師はただひとつ、こう言った。

「夕飯を食ってゆけ」

飯はうまかった。いや、うまいのだろう、と言うべきか。食欲がなかった。それでも男がやっと一膳食べたのは、医師の孫娘が、幼い手で懸命に作り、給仕してくれたからだった。医師は、そんな様子を見て取って、言った。

「時々来るといい。この娘は、客が来ると張り切って飯を作るからな」

「じっちゃん、ひどいよっ。いつもちゃんとやってるよっ」

愛らしく頬をふくらます娘を見て、男は微笑んだ。娘の、歳のわりに無邪気なところが好ましかった。

「そう、そんな風に笑え。笑いは薬になるからな」

医師は呟いて、酒をくいとおおった。

医師の家を出る頃には、いやな風は止んでいた。男は、落ち葉を避けるようにして歩き始めた。あの乾いた音を、聞きたくなかった。

半町ばかり歩いた頃、医師の孫娘の声が聞こえた。

「翔(かける)さま、かけるさま一つ」

男は、自分の名前を呼ばれて、立ち止まった。娘はすぐに追いついて、包みを差し出した。

「翔さま、お薬忘れちゃ駄目」

言われて男は、薬のことを完全に失念していた事に気付いた。

礼を言って、包みを受け取ろうと手を伸ばしたとき、彼の腕が少し袖からのぞいた。その腕が、あまりに白くて細かったので、娘はとても悲しそうな顔をした。大きな黒い目から涙が落ちそうになったので、彼女は急いで背を向けて、家に向かって駆け出した。

「薬、ちゃんと飲んでっ」と言葉を残して。

あまりに早く走り去ったので、男は、娘の悲しそうな顔に気が付かなかった。

一の四・五

帰路の途中、男はふと一本の木の下で足を止めた。それは、葉が数えるほどしか残っていない桜の木だった。むきだしの枝を広げる桜は、黒く、ごつごつした様子が余計に目についた。

枝だけの桜は、何故にこれほどまで無残なのだろう。もう一度桜が見たい。どういう訳か、男はふと思った。否、理由はわかっていた。桜花を見るには、春を待たなくてはならない。だが、彼には、もう春は巡ってこぬかもしれ

ないのだ。いや、今のままだったら、確実に巡ってこない。金持ちにも貧乏人にも、季節だけは平等にやってくる。—死ななければ。

寒かった。刀が、とても重かった。

ようやく家に着くと、男はまず火をおこした。本当はさっさと横になった方が良いのはわかっていたが、炉端に座ったままぼんやりと弱々しい炎を見ていた。

三年前、初めて江戸に来たときに見た桜は、とても美しかった。あの頃も、今と同じように、仕えるべき所も、共に住む家族も、金も、何もなかった。ただ、胸の中に病の獣は棲んでおらず、何もかもが楽しかった。

もしもう一度桜花を見られたら、男は呟いた。俺は、またあのときのような気分で、生きていけるのだろうか。だが、春は、今の彼にはあまりにも遠かった。晩秋の風で傷んだ体は、冬の冷たさに耐えるにはあまりにも心許なかった。

ぼろり、と、灰になった炭が、欠けて落ちた。ここで男は我に返った。炉の火がほとんど消えかかっていた。機械的に炭を落とし、だるそうに立ち上がって床を延べると、彼は布団に潜り込んだ。

冷たい足を持って余して眠れないまま、再び三年前の桜のことを考えていた。

二の一

「千住まで来れば、もうじきですな」

商人の、誰にともなく呟く声を聞いて、男は、もうすぐ旅の終わりだと人知れず微笑んだ。かなりの長旅だったが、あまり疲れを感じていなかった。

彼は、江戸に居る友人を頼って、はるばるやって来たのだった。故郷から遠ざかるにつれて、寂しさを感じるどころか、ある種の解放感が増していた。

別に何かをやらかして故郷を追われたのではない。むしろ、何もしなかったのが居場所を感じられなかったのだ。大した家ではないが、出来の良い兄が、万事うまく仕切っていた。早くに父を亡くした家としては、幸運とも言えるほどだった。

父のいない子供たちを、母は厳しく仕付けたが、関心はもっぱら長兄に向けられていた。書物にかじりついてばかりいる、おとなしい弟は、あまり注意を払われなかった。

男は、そのことについて特に思うことはなかった。どの

家でもよくあることだ。幼少の頃の寂しさも、子守のねえやが埋めてくれていた。そして、成長してからは、友と書物があった。

彼が書を読むのを、家族は勉強熱心ととらえていたが、実際のところ、学問だけでなく、文芸ものもよく読んでいた。読本の主人公に憧れ、そのようになりたいと、少年の頃は思っていた。

だがやがて、母が娯楽ものの本は取り上げ、厳しく禁じたので、男は、ものがたりへの憧れを、自ら筆を執ることで埋め合わせるようになった。他愛もないものがほとんどではあったが、友人たちは面白がって回し読みしてくれていたものだ。

だから、先立って江戸に出ていた友人から、寺子屋を手伝ってくれないか、と手紙が来たときは二つ返事で引き受けた。折しも兄が嫁を迎え、家はますます落ち着いて、男の居る必要はほとんどなかった。ここで無為に暮らすよりも、江戸に出て書物に囲まれていた方が良い。

二の二～四

男は休憩を終えて伸びをすると、また歩き出した。今日中に無事友人のところに着けるだろう。風は暖かく、春の日は長い。景色を楽しむゆとりもあった。そして彼は見たのだ。隅田川沿いに、桜が眩しいばかりに花開いているのを。

木の下に寄ると、男は、日の光をはじいて白く輝く花と、少しのぞく青い葉と、若々しくつやのある枝とを見上げた。花をこのように長く見つめるのは、子供のとき以来だった。これからは、花を愛でるという無駄なことに時を費やしても、咎める者はいないのだ。

男の顔にまた微笑が浮かんだ。寺参りの帰りらしい娘たちが、そんな男と、桜とを、眩しそうに見やっけて通り過ぎていった。

のんびりしていたので、友人宅に着いたのは夕方になった。

「翔、よく来たな」

昔そのままの口調で友は男を迎え、こうして彼は、江戸の住人の一人になった。

それからは毎日が楽しかった。まっすぐな少年たち、夜が更けるのも忘れて友人たちと交わす議論、次々出てくる新作の書物、そして寝食を忘れて自らも執った筆。楽しかった。—楽しすぎたのだ。叱る者のない生活は、

少しずつ彼の体を蝕んでいった。道に外れたことをしてはいなかったが、集中すると我を忘れる性格が災いした。そして…。寺子屋の教え子の一人が胸を患った。男は、読本や滑稽本などを持って、よく見舞いに行った。病に苦しむ少年は、それでも見舞いが来ると、目を輝かせて喜んだ。

少年は助かった。だが、やがて男は、病が自分の胸に棲みついたことを知った。後悔はなかったが、身体の衰えと共に、あれほど楽しかった日々が陰鬱なものになってきた。

たった三年前だったのだ、あの桜は。だが現在の彼には、ひどく昔のここのように思われるのだった。

三の一

医師のもとを訪れてから二、三日経って、友人が様子を見に来た。男を江戸に呼び寄せた、件の者である。彼は男の性格をよく知っていたので、早くよくなれとも、生活を変えろとも言わなかった。ただ、こう言った。「とりあえず死ぬな。故郷のおまえの母上や兄上に申し訳が立たない」

男は黙っていた。それでも、友人のこんなぶっきらぼうな言葉の裏に、思いやりと、そしてその思いやりを表に出さない気遣いを感じ取っていた。

友人は、柑子ひとやまと、書を二冊と、そして風車を一本置いて、帰っていった。

「酉の市がやっていたのだ。…おまえなら、熊手なんかより、これだろう」という言葉を残して。

俺はあやされている子供のようなものだな、と、男は風車をかざしながら苦笑した。そういえば、それこそ幼い頃は、これを持って走り回ることが大好きだった。

くるくと廻るのが不思議で、息が切れるまで走ったり、頬をふくらませて吹いたり、風を求めていつまでも高く掲げていたりしたものだ。ただ廻るだけの、何がそんなに面白かったのだろう。

しばらく眺めてから、彼はなんとなしに息を吹きかけてみた。風車は、ゆっくりと廻り出した。それを見ていてふと、幼いときのある日を思い出した。

三の二

日差しが照りつける、とても暑い日だった。彼は、ねえやに負われて一今にして思えば、彼女は医師の孫娘よ

りももっと幼かった—外に連れ出されていた。おそらく、幼児が家に居ては邪魔な何かがあったのだろう。

最初のうちはおとなしくしていたが、暑かったためか、やがて彼はむずがり出した。どうしてそうなったかは、今となってはさっぱりわからない。ただ覚えているのは、急に何もかも腹を立てたくなった、あの爆発的な思いだけだ。

当然ねえやはおろおろし出して、懸命に揺すったり、跳ねたり、歌を唄ったりした。どれも駄目とわかると、彼女は、ふいに道端にしゃがみこんでこれまた泣き出した—背中の子供よりも激しく。それに驚いて泣き止んだのだった。その日まで、自分以外の誰かが泣くことなど思いもよらなかった。そして背中から降りて、ねえやの前にしゃがみこみ、泣きじゃくっている様子を見ていた。見ているしかできなかった。

しばらくして、ねえやもようやく泣き止んだ。そして、とても恥ずかしそうに笑った。それから彼女は、その辺に生えていた草の茎と、細い葉で、器用に風車を作った。坊はいい子に泣き止んだから、これをあげます、と言って、風を受けて廻るのを渡してくれた。そして、一転して楽しげに笑う子供を見て、ほっとした顔をした。

三の三・四

それからしばらくして、ねえやは里に帰った。彼女の母親が死んで、幼い弟妹の面倒をみななければならないというのが、その理由だった。本当のところはわからない。ただし、その後の風の便りで、彼女は嫁いで、子たくさんになったと聞いた。

達者に暮らしているらしかったので、今日風車を見るまでは思い出さなかったのだが、ふと、どうして彼女はあるとき泣いたのだろう、と男は思った。幼い自分が我儘だったからか。だが、自分がぐずることなどいくらでもあったはずだ。では何故、あの日に限って。

男は、再びゆっくり風車を廻した。そして廻るのを見ながら、もしかしてあの日ねえやは、彼女の母の死を知ったのではないか、と思った。そうでなければ、危篤の報せを受けていたのではないか。

母を喪うという不安と、奉公先での心細さと、聞き分けのない幼子とで、彼女の張りつめていた気持ちに限界が来たのかもしれない。あの日、いい子に泣き止んだのは彼女の方で、風車をもらうべきだったのも、彼女ではなかったか。

今あのとこのねえやに会えたら。男は、廻る風車を見ながら思った。俺の方こそ、この風車を渡してやるのに。男は、もう一度ねえやのあの泣き顔を、火のつくような泣き声を思った。そして、ふと考えた。俺は死んでしまっても、あのように泣いてもらえることはないのではないか。子もなく、何も為さず、惜しまれることも、愛されることもしていない。

ぞっとする考えを追い払うため、男は障子を開けた。冷たい微風が入ってくる。それで風車はくるくる廻ったが、彼は、もうそれを見ようとはしなかった。

四の一

その翌日、寺子屋の教え子が訪ねてきた。胸を患った、例の少年だった。助かったとはいえ、病み上がりで、まだ蒼白く痩せていた。だが目だけは、強く、いきいきした光を放っていた。

「ご無沙汰しておりました、先生」

少年はそう言うと、男の正面に、きちんと膝をそろえて座った。

「ご家族は達者か」

「はい、おかげさまで」

「もう出歩いてよいのか」

男の問いに、少年は少しまり悪そうに身じろぎした。

「散歩にゆくといいのです」

「では、ここへ来るというのは、家人に知らせてないのか」

「...はい」

少年はしばしうつむいていたが、きつと顔を上げると、挑むような声で言った。

「ですが自分は、先生のお見舞いに来たかったのです。自分が病んでいて、何もかもから切り離されたような孤独を感じていたとき、先生が外と私を繋いでくださった。自分がされて嬉しかったことを返すのが、正しいのではないかと考えたのです」

それから、少年の声から挑むような調子がふっと消えた。

「先生は大人で、自分はまだ若輩です。私が嬉しかったことも、先生にはご迷惑かもしれないことも、重々承知です。...でも、でも先生も病気のときの自分のように、独りだと感じていらっしやるとしたら...そうではないと申し上げたかったのです。みんな先生の帰りを待っております」

男は微笑んだ。そして呟いた。

「そう、皆代わる代わる見舞いに来てくれて、私を待っていると言ってくれている。有難いことだ。...君も、まだ病み上がりなのに無理を押しに来てくれた。その気持ちがとても嬉しい」

少年の顔が明るくなった。

「ご迷惑じゃなかったですか」

男は頷いた。その気持ちに嘘はなかった。だが、後の言葉は、悲しい嘘だった。

「皆が励ましてくれるのだ。きっとよくなってみせるよ」少年の明るい顔が、みるみる悲しげになった。

「...先生、嘘はいけないと私たちに仰ったではないですか」

男はうろたえた。

「先生は、ご自分が助かることを信じていらっしやらない。どうして、私が助かると信じたように信じようとならないのですか」

ここで少年は、はつと我に返り、目を伏せた。

「生意気を申しました。許してください。でも...万が一にでも先生にもしものことがあったら、自分は...」

彼の顔が、ほぼ真下を向いて、切れ切れの声が洩れた。

「...先生を殺したのは自分だと...そう思いながら生きて...」

男は驚いて、うつむいて涙を堪えている少年を見た。ではこの子は、これまでそうして自分を責めていたのか。

「何を言う。他でもない、私自身の不養生が病の原因。君のせいなどではない。それに、肺病は遺伝病だと言われているではないか」

少年は、涙で光る目を向け、顔を上げた。

「臥している間、自分は、胸の病についてたくさん学びました。巷間で伝えられているような、業病などではありません。確たる証はありませんが、自分は伝染性の病だと考えています。...自分は将来医師になって、そのことを確かめ、治す手段を見つけたいと思っています」

男は、少年の力強い瞳を見た。この子には未来が、将来への夢があるのだ。先への希望が。

「先生が自分にくれた夢です。学ぶこと、人を知ること、蘭学の楽しさ、書の面白さ。私に教えてくれたことへのご恩返しをさせてください。...どうか、私が医師になるまで、生きてください」

男は、それには答えなかった。約束する自信はなかった。それで、ひとこと、呟いた。

「ありがとう」

それから立ち上がって、言った。

「冷えてきた。暗くなる前に帰りなさい。まだ無理をしてはいけない」

四の二

少年を送り出して、ふと木戸の横を見ると、医師の孫娘が立っていた。どうやら今のやりとりを聞いていたらしい。

「ごめんなさい。お客様なら帰ろう、って思ってたんだけど、つつい聞いてしまった」

「みちさよ殿…。どうして…」

「お菓子のお裾分けに来たの」

菓子とは、甘そうな干柿だった。去っていく少年の後ろ姿を見ながら、娘は呟いた。

「あの子、うちのじっちゃんに失礼だよ。自分が医師になるまで待てなんて。まるでじっちゃんじゃ、翔さまの病気治せないみたいじゃない」

男は苦笑した。

「県(あがた)殿は、名医だと俺は思うぞ」

「そうだよ、江戸一の腕前なんだから」

祖父思いの娘の言葉に、男の心は和んだ。

「日本一と言わぬところが奥ゆかしいな」

「…翔さま、私のことからかかってるんでしょう」

娘がふくれっ面をしたので、彼は遠慮なく笑った。それを見て、娘もにっこり微笑んだ。

「よかった。翔さま、やっと笑ってくれた」

娘は、笑ったまま背を向けた。

「私も暗くなる前に帰るね。干柿、ちゃんと食べてね」

「送っていこう」

晩秋の日は短かった。

「駄目、寒いよ」

「だが、若い娘さんを一人で歩かせるのは心配だ」

「娘さんだって」

嬉しそうに少女は呟いた。

「じゃあ送ってもらう代わりに、晩ごはん食べていってね」

四の三・四

娘は、歩きながら、ときどき嬉しそうに男の顔を見た。

「何か？」

男は尋ねた。

「翔さまが男前だから、一緒に歩いているのが自慢なの」

娘がさらりと答えたので、男の方がとまどった。口調があまりに無邪気だったので、蓮っ葉な感じはなかった。

「ならば役者にでも生まれればよかったな。生憎武士には意味がない」

男は冗談めかして答えた。実際のところ、自分の顔を意識したことはあまりなかった。

「翔さまは役者よりもっと綺麗だよ」

「綺麗、なあ。男にはあまり有難くはないが」

「でも、綺麗だもん」

そう言って娘は、男の横顔を見つめた。だが、その「綺麗」が、整った顔立ちばかりでなく、消えてしまいそうな儚さにも由来していることに気が付いて、また悲しくなった。

御馳走になって辞去する際、娘が再び外まで見送りに来た。

「またね、翔さま」

それから、彼女は半ばひとりごとのように呟いた。

「みんな翔さまのこと大好きなんだから。いないとすごく困っちゃうんだから」

自分はこの世に不要、とひがんでいる心を見透かされたような気がして、男は恥ずかしくなった。

皆が自分を生かそうと懸命に接してくれている。その思いに応えなくてはと思う。だが、肝心の己自身が、自分の必要性をあまり認めていないのだ。

俺は、皆の思いに応えられるほど、生きられるだろうか。一來年の春を待てそうもない、この俺が。

五の一

故郷から手紙が来た。主に兄からだだったが、母の言葉も書いてあった。健康を害したと聞いたが、重いのか軽いのか、帰ってきて家で養生したらどうか、もしくはこちらから人を送ろうか、等々書いてあった。とにかく、江戸で野垂れ死にしたとあっては、家の名折れになるので、様子を報せよとのことだった。

昔から直截的な言い方をする母だった。以前はそのような言葉に心を傷めたものだが、離れて暮らしていると、本音ともとれるようなきつい物言いが、かえて好ましかった。

おまえが心配だから、という言葉よりも、家の名折れだから、という言葉の方が負担にならなかった。つまり、

野垂れ死にさえしなければ、大した問題ではないのだ。逆縁で不孝ではあるが、もともと不孝者の息子だ。家に居続けて決定的な溝ができるよりもずっとよかったのだ。そこで男は、簡単な返事を書いた。病はそれほど重くはないこと、人を寄越すには及ばないこと、万が一があっても野垂れ死ぬ心配はないこと(皮肉と取られても構わなかった)、家を辱しめる真似は一切していないこと、等々。

だが、俺は自分自身を辱めているのかもしれない。もがきもせず、緩慢に死に向かうことほどの、己への侮辱はあるだろうか。

最後に、家族の健康を願うという言葉で結んで、手紙を書き終えた。

五の二

たった一通の手紙を書いただけで、ひどく気怠かった。そして、ぼんやりと母のことを思った。彼にとっての母は、いつもきりりとしていて、端正な顔立ちをいくぶん強ばらせた、蒼白い顔の女だった。およそ母という言葉から連想される柔らかさとは無縁だった。

かと言って別に冷たいひとというわけではない。例えるなら、女の人がたおやかな柳だとすると、彼女はたおやかさなど全く無縁な、まっすぐ伸びた青竹なのだった。そんな母のことを決して嫌いではなかった。ただ合わぬのだ。彼女の方でも、本人の言葉を借りれば、戯作などに読み耽るような女々しい下の息子は、頭痛の種だった。むろん息子たちが幼い頃は、世間並みに子供を可愛がり、甘やかしただろう。ただ自分にその記憶がないだけだ。

ふと男は、父と出会った頃の母はどんな娘だったのだろうか、と思った。今と同じく峻厳だったのだろうか。それとも、普通の娘と変わらなかったのだろうか。

男がそんなことを考えたのは、自分がいなくなった後、母が影響を受けるのか、全く変化がないのか予測がつかないからだ。ど、ここで彼は苦笑した。そんなことを気にしてどうなるというのだ？

五の三・四

男はまた、兄のことも考えた。自分より五つ年上で、武術も学問にも秀でた兄。何より、頑健な体で、逆縁を決してしないであろう、孝の見本のような兄。

しかも、弟のことを可愛がってくれた。父亡き後、文字を読むことを教えてくれたのは兄だった。彼がいなかったら、書を読む楽しさに気付かなかったかもしれない。

兄は悲しむだろうか。考えても詮なきことを考えた。だが、兄には妻と、昨年生まれた男の子がいる。心配ない。それを言えば、母にも嫡男と跡取りの孫もいる。

妙に安心感を覚えた。寂しさでなく安らぎを感じる俺は、狂っているのだろうか。それともこの安らぎは、寂しさを隠す己への自己欺瞞なのだろうか。

その夜夢を見た。満開の桜の下で、若い頃の母と、父らしい人物が、楽しげに笑っていた。母は笑いながら、柑子を父に渡したが、その柑子は、男が何時の間にか手に持っていて、返そうと手を伸ばしたら、受け取ったのは母ではなく、みちさよだった。

妙な夢だった。だが夢など、大概妙なものだ。枕元を見ると、先日友人が置いていった柑子が一つ、転がっている。夢の原因の一部はこれだろう。医師の孫娘が夢に出てきたので思い出した。明日は、薬をもらいに行かねばならない。

六の一

男が翌日医師の家に行くと、孫娘が一人で留守番をしていた。医師は、往診に行ったとのことだった。

「お構いはできないけど、待っててね」

娘は言って、綱に洗濯したものを通して吊るし始めた。男は縁側に座ってぼんやりと見ていて、娘の細い指先が赤くなっていることに気付いた。そうだ、もう冬なのだ。

「手伝おうか」

男の申し出に、娘は笑った。

「病気で薬もらいに来た人がお手伝いするなんて。それに、男の人が干しものするなんて、聞いたことないよ」それから、娘は笑うのをやめて、言った。

「翔さまって変わってるね...でも、優しいね」

言いながら娘は、冷たさで赤くなった指先をこすって、目を伏せた。

「大丈夫、すぐ終わるから」

そこへ、垣根越しに、近所の女が娘に声をかけてきた。

「みっちゃん、ちょっと」

「なあに」

娘は、垣根の方へ走っていった。が、男が立ち上がる

間もなく戻ってきた。

「うちの裏に生えてる南天の実をもらいに来たの」娘は説明した。「軽い咳ならそれで治るからって」

手早く干しものを済ますと、娘は男の隣に腰を下ろした。

「あのおばさん、いい人なんだけど、私のことみっちゃんって呼ぶのはやだなあ」

彼女は唇を尖らせた。

「何故だ？」

「ちゃんとみちさよ、って呼んでほしいんだもの」

娘が真面目くさって言うので、男も劣らず真面目に答えた。

「長ったらしいから、つい縮めて呼びたくなるのだろう」

「でも私はみちさよだもの。みちでもみつでもないもの」

「みちやみつでは大違いか？」

「大違いよ」

六の一

娘は、きりっとした目で男を見上げた。

「じっちゃはね、私にみちって付けたかったの。でもね」ここで彼女は笑って、「ととさまはさよって付けたかったの。だから、どっちかだけで呼んじゃいけないの」

娘は笑っていたが、男は、彼女が真剣なこと、そして祖父と父両方を大切に思っていることを知った。確か、この娘は両親を流行り病で亡くしていた。この名はいわば父の形見でもあるのだ。

「...ではみちさよ殿の母上は、なんて付けたかったのだ？」

男は微笑みを浮かべて尋ねた。

「ちよ。」

「ほう、では、皆の好きな名が入っているのだね」

彼の微笑を見て、娘はまた笑った。

「ヘンな名前、って思ってるでしょ」

ここで、娘の顔から笑いが消え、黒々とした瞳で男を見つめた。

「...でも、翔さまはいつも、ちゃんと呼んでくれるね」

その口調は、何故か男を驚かせた。彼を見つめる黒々とした瞳が、妙に己の目に焼き付いた。一黒い瞳が、眩しかった。

美しい娘だ。美しいだけではない、気立てが良くて、しっかりした娘だ。それなのに自分は、この娘がふさわしい者へ嫁ぐのを、見守ってやることさえできない。...見守

れるとしたら、草葉の陰からだ。

今度は男は、己の感情に驚いていた。娘を一人前の女性として丁重に扱ってはいたが、まだ幼いのだと思うことで自分の心に壁を作っていたことに、たった今気付いた。

だが、それがどうしたというのだ。...この娘は、子供らしい思慕で俺を見てくれている。俺は、それに応えてはやれない。この世で守ってやれないから。俺が病に打ち勝つには、冬に桜が咲くほどの奇跡が必要なのだ...。咳は毎夜毎夜ひどくなり、紅いものが混じり始めていた。

六の二・三

明日からは、ここへ来るのは止めようと思った。

「翔さま...？」

男の沈んだ様子に気付いて、娘が心配そうに覗きこんだ。そこへ、医師が帰ってきた。

男は、これほどほっとしたことはなかった。

久方振りに熱が出た。微熱はいつものことだったが、起き上がれないほどになるのは、男の気分を滅入らせた。隣家の女房が、この有り様を見かねて医師を呼んできた。

医師は診終えると、少し叱りつけるように言った。

「生きるのに無気力な一方で、体には無理をかけているのだな。...この見栄坊が」

男が、かなり状態が悪くなるまで、部屋を片付け、洗濯を怠らなかつたことを言っているのだった。

「もう少し人に頼れば、よくなるかもしれぬものを...」

それに対して男は返答しなかった。性分なのだ、と口の中で呟いたが、それは医師の耳に届かなかつた。仕方がない。家族でさえ抵抗があるのに、まして他人に自分の汚したものを始末させるのは、どういうわけか気が進まなかつた。医師の孫娘の言う通り、変わっているのかもしれない。

結局のところ、命を縮めているのは、この頑なさなのだ、と男は自省した。恥を忍んで故郷に帰ることも、頭を下げて人を寄越してもらうことも、人の好意にすっかり甘えることもできない。...医師の言う通り、それは見栄なのだ。おとなしく家に居られなかつたのも、学問の日々を送ったのも、病気の少年を見舞い続けたのも、全て見栄だったのだろうか。そう考えると、ひどく自己嫌悪に陥った。男のそんな様子を見てとって、医師は呟いた。

「これは、劇薬を盛らねばならんな...」

そして、帰っていった。

六の四・五

半時ほどして、何の前触れもなしに医師の孫娘がやってきた。布に包んだ鉢のような物を持って、いくぶん唇を引き締めて。

男は驚いて、思わず床から身を起こした。考えてみれば、こちらが行かないと勝手に心に決めただけで、先方が来るのは充分あり得るのだった。

「寝てなきや駄目」

そう言うと、娘はそつと男の肩を押して横たわらせた。

「翔さまちゃんと休まないから、私が今日からお世話することにしたの」

男は目を見開き、そして掠れ声で呟いた。

「世話を必要としている病人は、他にたくさんいるだろう」

「じっちゃんの他の患者さんは、治ろうと頑張ってる...」

諦めようとしているのは、翔さまだけだから」

娘の言葉に、反論できなかった。

男は、娘の持参した粥を少し口にすると、もう大丈夫だから帰るようにと再三言った。彼は焦っていた。こんな家に長居していたら、娘の方が体を壊してしまう。

「翔さまが治る気になるまで帰らない」

娘も強情だった。

「縣殿も心配する」

「じっちゃんは」娘は少し顔を赤くして言った。「いっそのまま翔殿の嫁にでもなったらどうだ、って言ったもの」

男は再び床から跳ね起きた。

「縣殿ときたら...冗談にも程がある...」

六の五(続き)・六

「もちろん冗談だけど」娘はうつむいた。「私、まだ子供だし、お転婆だし、美人じゃないし...でも、翔さまのお世話はできると思うな...どんな綺麗な女のひとより、大事に面倒見るんだから。それでは、いけない？」

男もまた、うつむいた。

「君は綺麗だし、もう子供じゃない...だから、だから帰ってくれ」

男の低い、切なげな声に、娘は、はっと顔を上げた。

表情から、少し憂いが消えた。

「翔さま、私のこと嫌いじゃないんだ。嬉しい。嬉しいよ」

それから、男の顔を覗きこんで言った。

「じゃあせめて、私がお嫁に来られる歳まで頑張れない？」

思わず男は苦笑した。

「...約束はできないな」

「ひどいよ、将来のお嫁さんが私じゃ、生きる気力出ないの？」

冗談めかして言ったが、娘の瞳は潤んでいて、悲しげだった。

「違う、俺の方が、君に相応しい男じゃない。俺には、何も...」

娘は終わりまで言わず、叫んだ。

「翔さま、自分のこと嫌いなんだねっ。でも翔さまが翔さまのことキライでも、私は翔さまのことが好きっ。じっちゃんだって、翔さまのこと気に入ってなかったら、冗談でも嫁になれなんて言わないっ」

娘の目からは、いまや涙が次々零れていた。男の胸は痛んだ。—俺がこの娘に相応しくないことは本当だ。だが、こんなに悲しませたくない...。

「ではこうしよう」男は呟いた。「数年は約束できない。でも、今度また君が来てくれるまで、必ず生きてると...約束する。それでどうだ？」

娘は、それを聞いて、涙と微笑みを一緒に浮かべ、大きく頷いた。

娘はそれから毎日やってきた。そして帰る度に、同じ約束をさせた。次に会うときまで必ず生きて、と。看護と約束が効いたのか、男の熱はかなりよくなった。

だが、一人になると男は、娘の「翔さまは翔さまのことキライなんだね」という言葉について考えていた。

七の一

いつからだったろう。男はまたぼんやりと、自己憎悪について考えていた。否、自己嫌悪はしたが、自己憎悪はしていない。だが、そういえばどうして彼女は俺が自己嫌悪していると...？

—翔さま、自分のこと嫌いなんだね—

生きることを諦めていたせいか。そのような己への最大の侮辱が、そうなのか。それとも、自分が無用の存在と考えているからか。だが実際、病で何もできない若い

男など、何の役に立つというのだ？

男は首を振って立ち上がると、ふらりと外へ出かけた。特に宛はなかったが、じっと座っているのが少し苦痛だった。

何故皆は俺に生きることを求めるのだ。俺にいったい何を見い出しているのだ。

七の二

小春日和だった。そのためか、路地で幼い子供が何人か遊んでいた。わらべうたと共に体を動かしている様子は、見ていてなかなか楽しかった。

理由はよくわからないが、彼自身はあのように遊んだ記憶はあまりなかった。兄と歳が離れていたせいかもしれない。

「うーらのきんぎょが一匹は一ねた」

聞き慣れない歌を唄いながら、子供の一人がぴよんと跳ねた。に一ひきは一ねた、と言いながら、二人目も跳ねた。それから三人、四人と続き、それだけの遊戯なのに皆楽しそうだった。

男は微笑んだ。それから彼らの方に近付いていった。

「六匹跳ねた」

唄って男が跳ねてみせると、子供たちは嬉しそうにけこけこ笑った。そして、最初の子供に戻って、また「うーらのきんぎょが...」と唄い、跳ねた。

だが、少し繰り返しただけで息があがったので、男は子供たちに別れを告げて歩き出した。なんと他愛のないことだろう。何気ない動作で息が切れたというだけで、気分が再び曇ってしまうとは。

これか。健やかなときのように気分を一定に保てない自分が、不甲斐ないからか。確かに昔は、自分が好きか嫌いか、考えたこともなかった。だが、死が忍び寄ってくる今は...諦める己を叱る自分自身も、叱る気力さえ失っていて...それでなのか。そうだ、好き嫌いとはかく、俺は己自身に価値を見い出していない。それか。

七の三

家へ戻ると、友人が遊びに来ていた。

「今日は風車はくれないのか、仙十郎(せんじゅうろう)」

男の言葉に、友人は苦笑した。

「少しは元気になったようだな」

「体はな...だが、一時しのぎだ」

すると彼は、ぎろりと目を光らせて言った。

「...何故、そう思うのだ」

男は、相手の顔をまともに見ることができずに、目を伏せた。

「治らねばならぬのはわかっている...だが、生きる意味がわからぬのだ」

「皆が必要としていてもか」

「...何故必要とされているか、わからない」

友人は男の顔をじっと見つめた。そして問いかけた。

「では、おまえは、私ガもし患ったらどう思う」

思いがけない問いに、男はとまどった。

「どう思うかと...。治ってほしいと思う。少しでも元気付けたいと思う。しかし」彼は、寂しげに続けた。「それとこれとは別なのだ。皆の好意と、俺自身の必要性とは...君が好かれるのはわかる。もし病に倒れたら、誰もが心配するだろう。だが、俺は、俺は何故好かれているのかわからない...」

友人は溜息をついた。

「おまえが、おまえ自身を見失っているのだな」

みちさよ殿のようなことを言う、男は思った。友人はふっと笑って話を続けた。

「必要性など、普段は誰も意識しないからな。そんなことをつべこべ言う前に、とりあえず日々を送らねばならない...おまえは病によって日常生活で立ち往生する羽目になった。それで、考えもしなかったことを考える機会ができてしまい、それ故に沈んでいる...阿呆か。何故必要とされているかわからないだと？必要とするのに理由などいるものか。好かれている理由探しなど、やめろ」

男は、素直に頷いた。

「...わかった。俺が自分の必要性を感じられなかったのは、皆の好意を素直に受けられなかったせいかもしれない...それでは、俺自身だけではない、俺に好意を持っている友たちへの侮辱にもなってしまうのだな...」

すると、友人は笑った。

「この期に及んで人のことを考えると、おまえは本当にお人好しだな」

「お人好しか...。そうではない、自分のためなのだ。己のことで、誰かを煩わせるのが不快なのだ」

「ほう」友人の目がきらりと光った。「では何故不快になるのだ？」

答えに詰まった男に、友人は笑って言った。

「そういうのをお人好しと言うのだ。一つ教えてやろう、私はおまえのそんなところが、割りと好きだ。いなくなったらさぞかしつまらんだろう」

七の四・五

友人が帰ってしばらくして、医師の孫娘がやってきた。「翔さま、迎えに来たよ。うちで一緒にゴハン食べよう」何故かはわからないが、この娘も俺を好いてくれている。優しい娘だから、同情かもしれない。たまたま顔形が気に入ったからかも知れない。だが、そんなことはどうでもよいのだ。仙十郎の言葉でわかった。俺はただ、感謝してその好意を受ければいいのだ。

「みちさよ殿」男は娘に言った。「心配かけたな。...俺はもう、自分のことを嫌わないと思う。俺がどんな人間であれ、皆が心配してくれている。それが今日は素直に嬉しいよ」

娘は目を丸くし、それから嬉しそうに笑った。

だが、人の好意を素直に受けるというのは、心を開いて人を愛すること、世界が愛しいものになるということだった。それはつまり、死への恐怖も強くなるということだった。

男は、ようやく気付いた。無気力と諦めで、死への恐怖をごまかしていたことを。心を閉じることで、未練を残さぬようにこの世との距離を置こうとしていたことを。

そんな己の弱さが恥ずかしかった。しかしこれで自分を欺いたまま死ぬことは避けられる。

夜が怖くなった。夜が来ると朝が来る。風はどんどん冷たくなってゆく。冬と死が、手を取り合って、やってくる。

八の一

また少し熱が出たので、男は数日床に就いていた。日中に横になっていると、近所中の音が壁越しに聞こえてくる。それはけっして不快ではなかった。ものやわらかに聞こえてくるそれらの音は、人の息吹を感じさせ、彼の物悲しい気持ちを和らげた。

ようやく熱が下がった夕方、男は床から出てふと違和感を覚えた。いつもなら夕食の支度で賑やかなはずの長屋が、妙に静かだ。それなのに、壁や戸越しに、どこか慌ただしい空気が伝わってくる。

男は着替えると、外に出てとりあえず隣家を訪ねた。行ってみると、親は出かけていて、子供たちだけが留守番をしていたので、その中の一人に、何かあったのか尋ねてみた。

「三軒向こうの良作(りょうさく)爺ちゃんが死んじゃったんだ。父ちゃんと母ちゃんは、それで手伝いに行った」

良作とは、同じ並びに住んでいる、木細工職人の老人だった。口数が少なかったので、男とはほとんど話したことはなかったが、家の前を通りかかるといつも目礼してくれた。

「つまらないな。ときどき独楽とか木切れとかくれたのに」

他の子供が呟いた。幼子にとっては、死とはそのようなものかもしれない。ただし、どの子供もとても寂しそうに見えた。

男は子供たちに礼を言って隣家を出ると、そのまま良作老人の家に向かった。

八の二

故人の家は、このような日特有の、騒がしさと厳かさが一体になっていた。近所中が集まっているようだ。男が焼香を済ますと、良作の息子がわざわざ礼を言いに出てきた。

「急は急なんですけど、親父もじき八十でしたから、大往生ですよ。寿命は仏さまが決めるもんだ、って口癖のようによく言っていました。あ、仏さまといえば」

彼はちょっとお待ちください、と一旦奥に引っ込んだ。間もなく戻ってきて、一本の木切れを男に差し出した。

「親父が、この通りの若いお侍さんに、と作ってたもんです。ご無礼承知ですが、どうぞ受け取ってやってください」

木切れと見えたものは、よく見ると荒く削られた観音像だった。未完なのだろう。だが顔だけは完成されていて、なんともいえない優しい微笑みを浮かべた、美しい表情だった。

「かたじけない。...だが何故某に？」

「あなたさまが病気になられてから、親父は気にしていません。若いもんが寝込むのは年寄りよりこたえるもんだ、って。そういう親父は寝込んだことなんかありませんがね。全く丈夫な爺ィで...もういなかったんですね。でも、まだ実感わかなくて...」

ここで息子は乱暴に顔を擦った。

「...すみません、余計なお喋りを。とにかく、お侍さんが早くよくなりますように、という年寄りの気持ちです」

男は再び心から礼を言い、観音像を大切に懐にしまつて、辞去した。

八の三

帰宅して、座卓の上に早速乗せてみた。男は信心深い方ではなかったが、老人の気持ちが有難く身にしみた。でも、男は思った。良作老人は、これを彫っているとき、完成させないまま死ぬとは思っていなかっただろう。

「寿命は仏さまが決めるもんだ、か...」

仏か神かは知らないが、寿命を決める「何か」は、人間の些細な事情など、まるで構っていないように思える。否、人間の生死そのものが、それにとっては、些細なのではなからうか。

無心に祈っていれば救われると思えるほど、信仰に関しては男は素直になれなかった。子供の頃は、天神様やら何やらに、いい子にしているので新しい草紙が手に入りますように、等の条件付きの祈りをしていた。だが、今となっては漠然と思うに、神仏は条件と引き換えに恵みを与えるのではない、いやむしろ恵みを受けるためにする祈りというのは不純なのではなからうか。救われるために善行を積むというのはどうなのか。報われなくとも行うからこそ行為は尊くなるのではないか。

善を行なっても報われるとは限らない。逆もまた然り。悪行の限りを尽くしても、大手を振って歩いている者もたくさんいる。過去世の報いだとか何とか言う者もいるが、男にはどうもそうとも思えなかった。

人間の行いに全く関係なく運命を決める「何か」があるのではないか、男は思った。その考えは、彼を少し不安にした。それでは、いくらあがこうと運命を変えることはできまい。迷いなく神仏にすがれる者が羨ましかった。男は、観音像の顔を見つめた。行灯の光に照らされ、その表情はますます優しく見えた。彼が信じようと信じまいと、見守ってくれるように感じた。ただ見ているだけなのだ。だが、見ていてくれる。それは、信心とはまた別の、これを作ってくれた人が込めた思いだった。その思いが、男の心を和ませた。

「ありがとう、良作殿」

届くか届かぬかもわからないが、男は、老人のために祈った。彼の希むところに行けるように、そして彼に感謝している者がいることも。

八の四

しばらくして、医師の孫娘が薬を届けに来た。

「翔さま、遅くなってごめんね。良作さん家のお手伝いしてたの」

「いや、むしろ俺が取りに行くべきだったのに済まないな。熱が下がったから、今日行こうと思っていたのだが」「またぶり返しちゃうでしょ...無理して良作さん家にも来てたでしょ、ちゃんと見てたんだから」

男は気付かなかったが、娘はどうやら台所かどこかに居たらしい。

「でも、翔さまならきっとそうするんだよね」

男は薄く笑って答えた。

「見栄坊だからな」

「違うよ。きっと翔さまは、誰にも褒められなくたって、そうするんだよ」

そう言われて男は少し驚いた。先刻考えていたことと関連していたから。

俺は無心に祈ることなどできないし、正直神も仏も信じていない。だから、報われようと報われまいと、己が正しいと信じたことをしていくしかないのだ。

男はそのことは口に出さずに、娘に観音像を見せた。

「良作殿が俺のために作ってくれたものだ...綺麗だろう」

娘は、黒い瞳を輝かせて、美しい表情に見入った。

「ほんと、綺麗ねえ」

かなり長いこと彼女は、像の優しい顔を見つめていた。

八の五

翌日、医師も訪ねてきた。

「どれ、熱も下がったようだな」

しかし、脈を診るために捲り上げた腕は、若い男らしい筋肉はあるものの、前よりも細く、蠟のように白く透き通っている。あまり良い兆候ではなかった。

「昨日良作老人のところに行ったそうだな」

男は黙って頷いた。

「儂も寄らせてもらった...いい死に顔だったな」

「確かに」

「何故だかわかるか？」

問われて男はとまどった。

「え？それは...」

「おそらくいつ死んでも悔いがなかったからだろうな」

「八十にもなったからですか？」

「どうかな。百になっても死にたがらない業突者もたくさん居よう」

「日々悔いのない生き方をしていれば、二十歳だろうと、百だろうと、有りのままの寿命を受け止められる、ということでしょうか」

「端的に言えばそうかもしれぬが、まあ聖人君子でもなければそれも無理だろうな」

医師は、観音像を見つめながら、続けて呟いた。

「いずれにせよ、『その日』まで精一杯生きた者があのような顔になれるかもしれぬ」

「良作老人は、寿命は仏さまが決めるもんだ、と言っていたそうです」

「...なるほどな」

医師は立ち上がった。

「翔殿の『その日』は、儂も協力して遠ざけたいものだな。...みちさよに泣かれる」

男は驚いて腰を浮かせた。

「縣殿は...」

それ以上言葉が出なかったが、医師はわかっているらしかった。

「儂に孫娘婿に、と狙われているのがそんなに恐ろしいか？」

そう言って笑った。それから、真面目な顔になった。

「確かに運命というのは変えられぬかもしれん。だが、病は絶望が大敵というのもまた事実なのだ。何でもいい、希望を持ってはくれまいか」そして彼は、低い声で呟いた。「あれの悲しむ顔を、もう見たくはないのだ」

男は改めて、医師が孫娘を、たった一人の肉親を、どれだけ大切に思っているか知った。

「俺も...俺だってみちさよ殿を悲しませたくはないと思ってます。でも、桜を...」

「桜？」

「桜を次に見られるまで持つのか、正直心許ないのです」

「桜か...」

二人は桜の間に横たわる、長い冬のことを思った。

「では桜を再びみられれば、だいぶよくなるかもしれぬな」

「そんなことはあるでしょうか？」

「あってもらわんとな」

そう言って、医師は帰っていった。

九の一

突然兄が来た。ついこの間手紙が届いたばかりだったので、男は少なからず驚いた。

「手紙を出してすぐに、思い直して直接来ることにしたのだ」

彼は説明した。つまり、男の返事が届くのを待たずして出発したのだ。ではあのそっけない返事の自分の手紙は、今頃母が読んでいるのだろうか、と、男はぼんやり考えた。

兄は、三年ぶりに会った弟の、痩せた体を、蒼白い顔を、そして絶望と儚い希みが複雑に入り混じっている瞳とを見た。そして、ただひとこと呟いた。

「馬鹿者が」

男はうなだれた。口調とは裏腹の、兄の悲しげな表情がやりきれなかった。兄弟はしばらく、向かい合って座ったまま、沈黙した。

かなり長い時間が経ってから、兄は再びぽつぽつと口を開いた。

「おまえの顔を見るまでは連れ帰るつもりだった」彼は言った。「母上も心配していたからな」

思いがけない言葉に、男は思わずうつむいていた顔を上げた。

「だがその様子では、旅はきつそうだな。それに、まだ江戸の方がこれからの季節、寒さはましだろう」

「いえ、こう見えても江戸もかなり寒いのです」

男もようやく口を開いた。だが、こんな気候の話をしているのが、なんだか間抜けているようにも思えた。

「...ならば、一緒に帰るか？」

再びの思いがけない言葉に、男はぴくり、と肩を震わせた。そして、口では答えずに、ゆっくりと首を左右に振った。

「...そうか」

また沈黙が流れた。その気まずさを振り払おうと、男は慌てて太一(たいち)は元気か、と尋ねた。太一とは、兄の息子の名だった。

「ああ、皆達者だ。...しかし母が少々老いた」

あの母が老いるというのも、男にとって意外な話だった。

「翔はあまり丈夫に生んでやれなかった、可哀想なことをした、と時々口にする」

あの母が！男は、ふと、自分の送ったそっけない手紙

を読んだときの彼女の顔を想像した。ひねくれた思いで書いたことを後悔した。

「先ほども言ったが、ひどく心配をしているのだ。…父親と同じ病気ではないかと、恐れているのだ」

「父上と…？」

そういえば、父が病死したことは覚えているが、具体的な病名は、これまでずっと聞きそびれていた。

兄は、男の蒼白い顔をじっと見つめた。

「…どうやらそうになってしまったようだな」

父も自分と同じ病で死んだ、そのことは男をひどくうたえさせた。記憶に残る父は、病に倒れるまでは、堂々とした偉丈夫で、この兄とそっくりだった。

「いらぬところばかり似たな」

兄の言葉で、はっと我に返った。

「兄上によいところが集まったのでしょうか」

薄い笑いを浮かべて言ったが、実際そうではなかったも思った。兄には妻がある。太一もいる。まだ見ぬ甥のことを考えると、男は病を得たのが自分であったのを不幸中の幸いと思った。

兄はそれに答えず、立ち上がった。

「では、おまえの医者や友人に挨拶に行くとしよう。翔、案内しろ」

九の二

まず医師の家を訪れた。医師と兄の二人が話をしている間、男は縁側で陽光を浴びながら父のことを思った。父と会話をしたという記憶はほとんどない。まだ自分は頑是なかったから無理もなかった。だから、思い浮かぶのは、主に視覚的記憶だった。書物に向かって座っている、芯の通ったまっすぐな、大きな背中。

そして男は、兄の横顔を見つめた。そう、確かこの兄のように、凜々しい眉と、涼しげな目もとと、筋の通った鼻と、意志の強そうな顎をしていた。

だが、見ているうちに自信がなくなってきた。あやふやな記憶が、いつか兄の顔にとって代わってはいないだろうか？

そこへ、茶を出し終えた娘が、男の隣に座った。彼女は、客人をちらと振り返ると、男に囁いた。

「翔さまのお兄様も、男前なのね」そしてもう一度振り返って、「でもあまり似てないね」

男も囁き返した。

「出来のいい兄でね、俺とは真逆の人間だ」

「翔さまったら、またそんなこと言って」

娘は笑おうとして、慌てて口を押さえた。

「みちさよ」

急に祖父に呼ばれて、娘は飛び上がった。

「至(いたる)殿に、改めてきちんと御挨拶せい」

娘がそっちに行ったので、男はまた考えに戻った。

父が病気になってからは、臥している部屋にあまり近寄らせてはもらえなかった。今にして思えば、幼い息子たちにやつれた姿を見せたくなかったのだろう。従って記憶の中の父は、弱々しさとは無縁の存在だった。

それに引き換えこの俺はどうだ。痩せ衰えた見た目はともかく、弱さを隠そうとして、かえって親しき者たちを悲しませている。

なるべく考えないようにしていたが、父が自分と同じ病で死んだことが怖かった。あの強い父が勝てなかったのに、どうして心が軟弱な自分が、死に勝てるだろう。

九の三

医師の家を出ると、兄は呟いた。

「腕の良い医者だな。それに、いい娘さんもいる」

男は同意した。

「そうそう、口約束ではあるが、あの娘さんをおまえの許嫁にさせてもらった」

男は目を見開いて立ち止まった。

「なんだ、話を聞いていなかったのか？」

「なんでそんな、勝手に…」

「あの娘さんももうそろそろ年頃だ。看病に出入りするなら、許嫁の方が聞こえがいいだろう。先方は異存ないそうさ。あとはおまえの気持ち次第だな」

そう言われて、男は少し顔を赤くした。そんな様子を見て、兄は珍しく笑った。

「おまえは昔から朴念仁だったな。だがあの娘さんは特別なのだろうか？」

「いえ、ついこの間まで、彼女はまだ子供とっておりましたから…」

「そうかな？」

兄にはとっくに気持ちを读まれている。それでも構わなかった。

それからしばらくの間二人は黙って歩いた。咳をする度に立ち止まる男の背中を、兄は複雑な表情で見つめていた。

九の四・五

その後何件かの男の友人宅を回り、挨拶を済ませた。

「おまえには、いい友達がいるのだな」

兄の口調は淡々としていたが、表情はどこか嬉しそうだった。そんな顔を見ると男はふと思ひ出す。初めて自分の名を書いた幼い日、教えてくれていた兄が、今と同じ表情で、「よく書けたな」と言ったときのことを。

家族はない、などと拗ねていたが、家を出ても家族は家族なのだ、と男は妙に素直な気持ちになった。そして、離れて暮らしてみてもよかったのだ、と改めて思った。共に暮らしていたら、このような気持ちを抱くこともなく過ぎていただろう。

兄は、男の家の近所に宿をとっていた。

「余分の布団を借りるのも煩わしかろう」というのが理由だった。そして、夕食は弟を宿に呼び寄せて、共に食べた。

男は食べながらも落ち着かなかった。兄は特に何の感情も表さずに箸を運んでいるが、弟の食欲の衰えぶりには気付いているはずだった。...無理をして食っているな。そう思われているような気がした。

兄と別れて宿を出て、男は少々ほっとした。彼が自分の所に泊まらないでくれたのが有難かった。夜中の咳の発作は聞かれない。隣近所に響かぬよう、布団に潜り込んでしているが、同室ではわかってしまうだろう。あの引きつるような音を知られたら、何と思うだろう。

九の六

結局兄は、三日間江戸に居て、帰っていった。その間見物するでも何かをするでもなく、ただ弟と縁側に座っていたり、医師の宅を訪れたり、近所の堀の鯉を眺めたりしていただけだった。

「勤めがあるので、これ以上は居られぬ。...春になったらまた来る」

代わりの者を寄越すという兄の提案は、それだけは強固に断った。今以上に悪化したら、医師の方から兄の元へ報せをするということで折り合いを付けた。

去って行く兄の大きな背中を見ながら、男は、彼は何をしに来たのだろう、とも思ったり、否、おそらく目的は果たしたのだ、と思ったりもした。

彼の方では、また春に会おうと考えている。だが、自

分の方では、今見ている背中が、もしかしたら今生の別れかもしれぬと考えている。自分が、背中を見送る立場なのがまだ有難かった。

去り際、兄はこんなことを言った。

「女人というものは、男よりずっと早く大人になるものだ。あと三年もすれば、みちさよ殿はおまえよりずっと大人になるかもしれぬぞ。それに」彼は微かに笑って付け加えた。「今より更に美人になるだろう」

俺には、待っているものが増えていく。兄と、桜と、友たち、教え子たち、そしてみちさよ殿。どれもとても大切な。だが、とてつもなく遠くで待っている気がするのだ。春の前には、必ず冬があるから。

十の一

兄を少し先の宿場町まで見送ったので、浅草まで戻った頃にはもう暮れかかっていた。家に帰る頃にはすっかり夜だろうな、と考えながら歩いていると、数間先の横町から、怒鳴り声が聞こえてきた。

場所柄居酒屋も多い。酔っ払いだろうと男は見当をつけたが、何か胸騒ぎがして思わず歩を止めた。それとほぼ同時に、横町から女中らしい女が転がり出てきて、男の袖にしがみついた。

「お侍さま、お助けください、酔っ払いが暴れて...」

女はおかしなくらい震えていた。まるで滑稽本か芝居のような展開だ、と男はぼんやり思った。その間に、店からその酔漢が飛び出してきた。

一目見て、通常の酔っ払いより始末が悪いことに気が付いた。顔色は赤くなく蒼くなっており、目は奇妙にすわってぎらつき、手には抜き身の刀を持っている。他の客らしき者たちや、横町の者は、そのせいで近寄れないでいた。

この酔漢も、江戸中に散らばる、「何も持たざる侍」の一人なのだ、と男は思った。病の代わりに、酒が体を蝕んだという違いしかないのだ。だが、だからといって哀れみも共感も覚えなかった。むしろ、近親憎悪ともいべき感情がこみあげてきた。

酔漢の奇妙な目線が男に留まり、余計にぎらついた。本能的に男の軽侮を感じたのかもしれない。刀が目と同じように気味悪く光った。

十の二

歩きながら男は、己の中に吹き荒れる感情にとまどっていた。自分も無傷で済んだし、相手も斬らずには済んだが、むかむかした気分は晴れなかった。これからでも自分もあのようになるかもしれない、と思ったからだった。死への恐怖を紛らわすために酒に溺れる。ありそうなことではないか。

そして、思った。斬ってやった方が、あの男のためだっただろうか。武士としての誇りも何もかも失って、酒に呑まれるしか生きる術がない者など。

だが、歩いているうちに、昂っていた気持ちが落ち着いてきた。...あれでよかったのだ。あの酔漢も、案外家に帰れば妻や子がいるのかもしれない。故郷に老いた父母がいるかもわからない。男は、武道を教えてくれた兄に、改めて感謝した。

しかしこの話をしたら、兄はどう思うだろう、と考えると少し可笑しくなった。彼が帰った後で幸いだった。まあもし兄と一緒にいたら、もっと穏便に片付いたかもしれないが。

とにかく、とりあえず今日はまだ死ぬ日ではないらしい。運命とは不思議なものだ。病で死ぬと思っていたのが、酔っ払いに斬り殺されそうになったりする。神か仏かは知らぬが、「何か」は相当悪戯好きなのかもしれない。

十の三

家に帰ると、点けてこなかったはずの灯が窓から見えた。中に入ると、医師の孫娘が来ていて、何か汁物を煮ていた。

「翔さま、おかえりなさい。お弁当も作ってきたよ、一緒に食べよう」

「梟殿は？」

「じっちゃんは、往診に行ったの。じっちゃんもお弁当持っていったんだよ」

娘の笑顔で、ささくれ立っていた神経が完全に鎮まった。

「お義兄さま今頃どの辺に居るのかなあ」

「なかなか健脚だからな。思ったより遠くへ行ってるさうだ」

娘は、汁をよそいながら呟いた。

「...至さまが、本当にお義兄さまになったら、嬉しいな」

娘の顔は、恥ずかしそうだが明るかった。

「あんな兄だが、気に入ったか？」

「うんっ」

無邪気に笑う彼女を見て、男は、今日の帰り道のことは内緒にしておこう、と心に決めた。

十一の一

あんなことがあったにも拘わらず、兄が帰ってからの数日間、妙に体調の良い日が続いた。季節外れに暖かかったからかもしれない。この気候に騙されて、桜が咲いてはくれまいかなどと、冗談とも儂い希みともつかぬことを思ったりもした。

どういうわけか、桜が咲くのをもう一度見られさえすれば、俺は生きられる気がするのだ。

そんなことが起こるわけもなく、男がいつものように医師の家に向かって歩いていると、花が咲くどころか、葉もかなり散った桜の木の下で、近所の者が落ち葉を掃き寄せて焚き火をしていた。煙の他に、香ばしい匂いも漂っている。それが甘藷の焼ける匂いだということがわかるまで、少々かかった。

焚き火の番をしていた老人が、男に笑顔で挨拶し、程よく焼けた芋の一つ勧めた。

「十三里は、滋養になりますからな」

聞き慣れない呼び方に、男は一瞬当惑した。それが、九里(栗)より旨い、という甘藷を示す洒落なのを思い出して、微笑みを浮かべて受け取った。

医師の孫娘にやろうと芋を手拭いで包んで懐にしまうと、老人と少々立ち話をした。立ち去るとき、ふと燃えた葉の黒く焦げた灰を見て、故もなくぞくり、と身を震わせた。懐の中の芋のおかげで、体はむしろ温まっているはずなのに。

十一の二・三

娘に甘藷を渡すと、思いのほか喜んだ。

「じゃ、先におやつにしようよ」

そう言って彼女は茶を淹れ、祖父と男の前に出した。そして、きっちり三等分した芋も運んできた。

「知ってる？皮ごと食べると胸焼けしないんだって」

おいしそうに食べる娘を、男も彼女の祖父も、嬉しそうに眺めた。その視線に気付いて、彼女は顔を赤らめて唇を尖らせた。

「見てないで、二人とも食べてよっ」

男はようやくひとかけだけ食べ、残りは娘にやった。おそらく、とても旨いのだろうが、喉がどうしても受け付けなかった。これでもすこぶる体調が良い方だというのに。

翌日、教え子たちが何人も訪ねてきた。わざわざ持ってきてくれた手土産が、焼いた甘藷だったので、男は人知れず苦笑した。

全員がそれなりに礼儀正しい少年たちだったが、部屋が狭いので少々あたふたし、子供らしい活気と賑やかさがしばらく辺りを包んだ後、ようやくそれぞれに座って落ち着いた。そして、中の一人が口を開いた。

「先生、先日は一郎太(いちろうた)が一人でお邪魔したそうですね。あいつ今日も来たがっていたのですが、親御さんが大事をとってまた今度って事になったんです。もうすっかり大丈夫そうなんですけどね。先生によろしくお伝えくださいって申しました」

それは本当によかった、と男は微笑んで答えた。全員でひとしきり近況報告や世間話をした後、別の少年が尋ねた。

「先生、最近、浅草の方へお出かけになりませんでしたか？」

十一の三(続きその一)

「兄を見送りに往復で通ったが、それがどうかしたかな？」

すると、少年たちは嬉しそうに顔を見合せて、口々に呟いた。

「やっぱり、先生だったんだ」

「話を聞いたときからそうじゃないかって思ったけど」男が訳がわからず困惑していると、先ほどの少年が続けて説明した。

「うちで働いている者が何人か、四、五日前に浅草寺参拝に行って、そこで、辻斬り紛いの酔っ払いを、峰打ちで鮮やかに仕留めた若い侍を見たんだそうです」彼は目をきらきらさせて続けた。

「その侍は、浪人風に月代が入ってなかったけど、背が高く細身の、二枚目役者みたいな顔をしてたって。それで、もしかして先生じゃないかって思ったんです。うちの者も、そういえば寺子屋の先生そっくりだったって言ってました。ただ、先生は養生中だったから、御本人かどうか今日まで確認なかったんですけれど。やっぱりそうだったんですね。すごく格好良かったって、みんなうっとりしてましたよ」

思いがけないところで知人に見られていたのだ。男は顔を赤くした。心の中に渦巻く感情を覗かれていたら、到底格好良いなどと思われなかつたらう。

「...いや、とんだところを見られたな。実際のところ、そんな格好良いなどというものではない」

男の言葉に、少年たちは驚いて目を丸くした。

十一の三(続き)

「私はあの酔漢に、己の嫌な部分を見て、気持ちの上で斬った。...人助けのためではなかったのだ。それは、決して褒められる行為ではない」

全員が沈黙した。彼らは今、真剣な目で男を見つめている。

「己にもある弱さを、あの男に示されて、怒りを覚えてしまったのだ。...こんな私にもものを説く資格はないが、君たちには私のような弱い人間になってほしくはない。...すまなかったな」

しばしの沈黙の後、先ほどの少年が再び口を開いた。

「うちの父が言っていました。強いふりならいくらでもできる。己の弱さを認められる者こそが本当に強いのだと」彼はにっこり笑って続けた。

「恥と思うことも正直にさらけ出して、真剣に答えてくださった先生は、やはり格好良いと思います。尊敬の気持ちに変わりありません」

他の少年たちも、大きく頷いた。

「先生に、もっといろいろな事を教わりたいと思っています。...早いお帰りをお待ちしています」

男は驚きでしばらく口がきけなかった。こんな弱い俺でも、この子たちは受け入れてくれている。幻滅してもよさそうなものを。

「...ありがとう」

今、男は、恥ずかしさよりも、素直に有難かった。

十一の四

少年たちが帰った後、友人が訪ねてきた。

「今日は客人の多い日だな。仙十郎、あの子たちに会わなかったか？」

「ああ、会ったぞ。明日休んだりしないように釘を差しておいた」

と、彼は笑って答え、男の顔を見た。

「子供たちが言っていたぞ。読本の主人公のような峰

打ちをしたそうだな」

「あれはそんなではないと言ったのに...違う」

それからしばらく、友人は、男の語ることにじっと耳を傾けた。

「なるほど、己の醜い部分を、その酒に溺れている酔っ払いに見出したという訳か」

咳いて、友人は笑った。

「ではおまえは、さしずめ桜に溺れているというところかな...桜といえば、珍しい桜が近くの丘にあるそうだ。体力に余裕ができたなら、行ってみるといい」

そして、付け加えた。

「おまえはその酔っ払いのようにはならない。心配するな。そうなるには、おまえは自分に厳しすぎだ...尤も、甘すぎる部分もあるがな」

十一の五・六

友人が帰った後、男は、いつものようにとりとめなく考えに耽った。—確かに、甘いのかもれぬ。死病を患っているということに、甘えてはいまいか。駄目な部分を見せても、愛想を尽かさぬ皆のためにも、何としても生きねばならぬのではないか。

それでも、胸の奥底に沈む虚無感が拭い去れなかった。皆の好意があり、自分がいくらこの世界を愛しても—ドウセオマエハ死ヌノダ—ただ生きること、それだけでこんなに疲れてしまう。疲れきって、死に滑り落ちていきそうな自分がいる。死に甘えてしまいそうな、己がいる。

夜が、いつもにも増して長かった。悪寒がして、歯がちがち鳴った。やはり好調は長く続かなかった。咳をし、震え、そしてまた咳き込みながら男は、体が弱ると心も弱まるのか、心が弱ると体が弱るのかわからなくなった。

十二の一

申し合わせたように、翌日からまた木枯らしが吹き始めた。医師は男の容体を見て、少し顔を曇らせた。娘はまた看病にやってきた。男の友人の持ってきた火鉢の側で、縫いものをしたり、本を読んでやったりしていた。娘は、本を読む以外はあまり喋らなくなった。自分が話す時、男が無理をして返事することに気が付いたからだった。熱で温くなった手拭いを替える度、彼女はまず自分の手を彼の額に這わせて、少しでも下がってはいないかと調べる癖がついた。このときほど娘は、己の幼さ

を悲しく思ったことはなかった。

「私があと三年歳をとっていれば」彼女は胸の内を呟いた。「翔さまのお嫁さんになれて、夜中も一緒に居てあげられるのに」

帰らなければならないのが、とても悲しかった。帰るときになると娘は、必ず明日まで待っててねと念を押す。男は、熱に潤んだ目を向けて頷く。そんな日が繰り返された。

医師は毎夕刻、男を診察しに来て、孫娘と共に帰っていたが、ある日男に言った。

「...そろそろ至殿に、手紙を出そうかと思っている」

男は力なく頷いた。もう我儘を言える状態でないのを知っていた。娘にばかり己の看病を任せるわけにはいかない。このままでは彼女の方が倒れてしまう。ただでさえ忙しい時期に、こんなことになった自分が悔しく、申し訳なかった。

気が付くと、友人の他にも、近所中の者が何かしら世話をしてくれていた。自分如きが存在しなくなっても何も変わらない、かつて思っていたことが、とんだ思い上がりだと今更ながら自覚させられた。そして、改めてはっきりと気が付いた—死にたくない。死ぬことがとても怖い、怖いのだ。

十二の二

夜中にうとうとしては、咳や悪夢で目が覚めた。その度に、行灯を点けては、良作老人の遺した観音像を見つめた。

寿命は仏さまが決めるものだ。—彼の口癖のように言っていた言葉。神か、仏か、何かは、俺の寿命をもうすぐと決めたのだろうか。未だにこの世に役立つことを何一つ成していない俺を。

俺はともかく、生まれて間もない赤ん坊、幼い子供たち、志半ばで力尽きる者たち、彼らの命を奪ってしまうのはいったい何なのか。遺された者たちに悲しみと嘆きを与えるために生まれてきたとしか思えない。短い命とは、そんな寿命は、いったい何によって決められているのだ。前世の業か。先祖の悪行か。だが、ではそんなことで決められてしまう運命とは、人生とは、いったい何だというのだ。

「俺は何のために生まれてきたのだ」

男は、観音像に向かって呟いた。人類の歴史が始まってから、おそらく数え切れないほどの人間が、この疑

問を呟いていたことだろう。

観音像は優しく微笑むだけで、何も答えはしない。男は、像を握り締め、すすり泣いた。涙を恥じる気力も、今はなかった。

十二の三

今日も娘は男に、物語を読んで聞かせていた。子供に読ませるようなおとぎ話や、滑稽本などを選んでいたが、男は笑うでもなく、ただ静かに聞き入っていた。

しばらくして男は、読みかけている途中で止めさせた。いぶかしげな顔をする娘に、彼は力無く呟いた。

「みちさよ殿、ありがとう。...だがもう明日から書物はいいない。...俺は、俺は...もう笑えない...」

娘の目が見開き、唇が震えた。それを堪えて、彼女はわざと明るい声を出した。

「大丈夫だよ翔さま、熱が下がればまた笑えるようになるよ」

男は首を振った。その諦めの混じった寂しげな顔と、儂げな瞳が、娘の自制心を打ち砕いた。彼女は大声は出さなかった—ただ大粒の涙が、次から次へと転がり落ちた。

「やだっ、やだ...。翔さま、諦めちゃうなんて、やだよ...」

「すまない...」

男の言葉に、娘もまた、首を振った。

「いやっ、翔さまが死んじゃうなんて、絶対やなんだからっ...」

涙が男の顔に降り注いだ。—ああ、俺は...。こんな悲しい顔をさせたくなかったのではないか。もう少し、もう少しだけでも、この娘と、そして俺自身に嘘をつかなくては...生きる、と。

十二の三(続き)・四

頬に降り注ぐ娘の涙がとても温かかった。男は、布団から手を伸ばした。白く細い指で、その止まらない涙を優しく拭った。濡れた彼女の顔も、とても温かかった。

「翔さま...」

娘は驚いて一瞬泣き止んだ。それから、微笑んで、男の手の上に自分の手を重ねた。

「みちさよ殿、俺は死にたくない...」

己の頬の上の白い指に、自分の指をからめて、娘は

頷いた。

「死ぬのがとても怖いのだ」

からめた指に力を込めて、娘はまた頷いた。

「翔さまは死なないよ。...諦めなければ、きっと大丈夫だよ。私が、きっと死なせないから」

娘は、男にも自分にも言い聞かせているかのようだった。

「...本当に、こんな弱い男でいいのか？」

男の問いに、娘はまだ目に涙を溜めたまま、幽かに笑って答えた。

「...だって翔さま、私の手を握っちゃったじゃない。責任とってお嫁さんにしてもらわなきゃ。...あ、手握っちゃったの、私の方か」

そして娘は、握っている指にさらに力を込め、空いてる方の手で男の髪をなでた。

「格好いい翔さまだけを好きなんじゃないよ。死ぬの怖い、って正直に言える翔さまも、大好き」

医師が来た頃には、娘は泣き止み、男も落ち着きを取り戻していた。

「ほう、少しだが、熱が下がったようだな」

医師が嬉しそうに呟いた。

「また明日ね、翔さま、約束だよ」

娘は囁き、祖父と共に帰っていった。

十二の五

一人になって、男はまた観音像を見つめながら思った。このまま死んで、皆を悲しませるだけだとすると、俺はいつか何のために生まれてきたのだ。どうせ死ぬと決まっているのなら、何故生まれてくるのだ。神か仏か「何か」があらかじめ全ての運命や寿命を決めているとしたら、俺は何のために生まれてきたというのだ。何のために...。

この観音像を作った良作老人は、子を残し、職人としての技を残し、この像を残した。長い生涯を、充実して過ごしたのだ。だからこそ、あのような言葉—寿命は仏さまが決める—と言えたのではないか。

俺はそう素直に思われない。八十の老人よりも、明日への希みが儂いから。

何故だ、何故だ、何故だ。

そして男は、父のことを思った。大きくて、強くて、頼もしかった父。そんな父が、病に負けて、逝ってしまった。今の自分と同じ病で。父の事を思い出すと、何かの不安

な影が心を過った。幼い頃の思い出せない記憶の影が。何だろう。それから母のこと、兄のこと、嫂のこと、まだ見ぬ甥のことを考えた。今ではもはや、身内が自分に無関心でないことが信じられた。それだけに、嘆き悲しむ様子が厭でも想像され、その想像が彼の心を締め付けた。母に、母に手紙を書き直さなくては...だが、何と書けばいいのだ。

何と書けばいい。

仙十郎のこと、その他の友人のこと、教え子たちのことも思った。一緒に居て楽しかった日々。地位も、名誉も、食うものに事欠いていても、何も不足を感じなかった。病に倒れ、己が以前の自分でなくなっても、彼らは皆変わらず接し、回復を信じて待っている。

何故俺を必要としてくれているのだ。

そして...医師と娘。あの二人は、知り合って数年しか経たぬのに、それこそ身内のように接してくれていた。ぶっきらぼうや口調で、温かい言葉を言う県殿...こんな自分を、心から慕ってくれているらしい、みちさよ殿...

娘の、「約束だよ」と囁いたときの、黒い瞳が目にとらついた。約束の次の朝が、とても遠い。そして、桜の季節まで、長い夜が無限に続くように思われる...

何度長い夜を繰り返してもやって来ぬ、桜の季節。

十三の一

寒かった。凍えるのではなく、白い陶器のように冷たくなっていくような。凍えるのは、温かい血の通った、生きている者だけだ。

はっと我に返ると、火鉢の炭がほとんど燃え尽きていて、消えかかっていた。寒さの原因はこれか、と、男は安堵の溜息をもらした。何のことはない、炭を足せば、またすぐに暖かくなる。暖かく一。

消えかけた炭火の白い破片が、ぼろりと崩れた。粉々になったそれは、力無く散らばった。一幼い頃寺で見た、一握りの灰のように一。思い出せなかったこと、否、思い出すまいとしていたこと。それは父の灰ではなかったか？父の骨ではなかったか？

「ああ、うわあああッ」

男は叫んだ。その声は弱々しく掠れ、咳に紛れた。あの大きくて強かった父は、死んで焼かれて、灰になってしまった。壺に収める際に、上から蓋で押された骨は、ぐしゃり、と音を立てて潰れた。はみだした一握りの灰が、冷たい風にさらわれて、あっという間に吹き散らされてしま

った。それでも壺の周りに残った砂粒のような骨の欠片は、悲しいほど白く、あちこちが尖っていて、石の上で冷たく光っていた...

男は表に飛び出した。

十三の二・三

外の方がもっと寒いとわかっていた。だが、もうこれ以上じっとしていられなかった。風が吹き付け、激しく咳が出た。それでも男は構わず歩き続けた。歩いては息切れし、冷たい空気を吸い込んで、また激しく咳をし、そしてまたがむしゃらに歩いた。

逃げたかった。死から、己自身から、そして何より、人間の思惑を遥かに越えて、無情に駒を進める何かから、逃げたかった。冬はもう追いついている。死と手をとりあって、追ってくる。

—もう一度桜が見たい—

「もう一度、桜が見たい...」

男は想いを口にした。

初冬の日はずっと逃げ去っていた。白く冷たい月が、男を照らした。それでも彼は歩き続けた。どこへともなく歩き続けた。

歩きながら、とりとめない思いがぐるぐると回る。たとえこのまま倒れても、誰かのもとへ行くわけにはいかない。俺は今、死に追いつかれそうになっている。死が俺と共に走っている。誰かのところへ行ったら、その大切な誰かにも死が追いついてしまう...

歩け、歩け、歩け。

十三の四

よろめく足取りで、男は一本の木の側を通り過ぎた。通り過ぎてから、彼はふと足を止めた。呼吸が鎮まってから、おそろおそろ振り返った。目を見開いた。引き返して、その木を見上げた。とても信じられなかった。だが、それは...その枝先に震えているのは一。

「...桜だ！」

数は少ないが、それはまさしく桜の花だった。

「俺は狂ったのか？それとも狐に化かされたのか...？」

だが、狐狸だとしたら、優しい怪しに違いない。こんな寒空に、花を見せてくれるとは。

否、幻でも見間違いでもなかった。月明かりで、白地にほんのわずかに紅を刷いたような色まで見えた。春のと違ってどこか寂しげで、貧弱だったが、桜には違いなかった。

男はしばらく立ちつくしていた。花は、寒風にさらされて、震えている。それでも懸命に枝にしがみついていた。一見弱々しいのに、春の桜のように儂く散ることなど、考えてもいないようだった。

「そういえば、仙十郎が、桜のことを何か言っていたっけな...」

珍しい桜がある、そのうち見に行くとよい、と友人が言っていたのを、今思い出した。

桜は春のものと思い込んでいたが、冷静に考えてみれば、桜には種類が豊富にあるのだ。そういえば、寒のうちに咲くものもあるという。そのことを今まで全く思い出さなかったのが、不思議なほどだった。当然、秋咲きのものもあるだろう。狂い咲きのものもあるだろう。

奇跡でも何でもなし。しかし、そうとわかって、彼は花の下から動かなかった。

十三の四

神か仏か、運命をもたらす不吉なものとして男を捕らえていた何かは、有り得ないと思っていた冬の桜を彼にもたらした。駒を進める何かにとって、重大なことも些細なことも、等しく同じなのだ。寿命を定めることも、気紛れに花を咲かすことも。それを無情と捉えるか、ただ無常なのだと捉えるのも、全て己自身なのだ。

花は咲いている。明日には散る運命かもしれぬのに。関係なく、咲いている。

たとえ寿命というものが定められているとしても、その日までどう生きるかは、己自身で決められるのだ。そして、そもそも寿命は、最期の最後まで生きてみて、初めてわかる時間制限だ。とにかく今、俺は生きている。この花のように。この花も、明日に散るのか、明後日に散るのかわからないが、とにかく今は咲いている。俺だって、明日のことはわからぬが、とにかく今は生きていて、こうして桜を見ている。

生きている。俺もこの花も。たとえ見る者が誰もいなくとも、そんなこともまた関係なく、この花は咲いているだろう。こんな寒いときに咲かずともよいのに、こうして咲いて、桜を見たいと願っていた俺の希みを叶えてくれた。否、この花は、人の役に立とうと思って咲いたのではないの

だ。役に立とうと立つまいと、そんなことには構わずに、与えられた命を限りまで生きている...

俺もこの花と同じで良いのだ。今初めてわかった。身内や友たちが、俺に望んでいること。役に立とうと立つまいと、ただ居ればよいのだ。役に立つこと、形になるものを残すのが、必要の全てではない。ただ咲いているだけのように、ただ微笑んでそこに居るだけでいい。そう思っている人々が、俺の周りにはたくさん居てくれているのだ。

そして、誰かのためでなくてもいい。ただ生きていれば、精一杯生きていけば、それだけでもいいのだ。

十三の六

たったそれだけのことに気が付くまでに、どれだけ廻り道をしたのだろう。そして、季節外れの桜を見た、それだけで突然心が晴れ晴れした。そんな自分が、とても可笑しかった。笑いがこみあげてきた。

男は笑い出した。咳きこみながら笑った。涙が出るほど笑った。木にもたれかかって笑った。そして、笑いながら泣き出した。笑いとしゃくり上げる音が混ざり合い、涙がぼたぼたと桜の根に落ちた。

ようやく笑い泣きが落ち着くと、男はそのままぐったりと体重を木に預けた。疲れきっていたが、その疲労感が心地よかった。こんなに笑ったのも、激しく泣いたのも、本当に久々だった。

荒い呼吸が収まると、男は呟いてみた。

「寿命は、仏さまが決めるもんだ...」

良作老人のこの言葉を呟いてみて、彼はまた笑った。笑いながら、桜を見上げた。桜も、笑っているかのように揺れていた。笑って笑って、笑い続けた。一今はまだ、俺も生きている。

終章一～三

ようやく家に帰り着いた頃には、家の中は冷えきっていた。男は、身震いを一つして呟いた。

「おう、寒いな」

だがそれは、決して不愉快な感じではなかった。ぞくぞくするような寒さではなく、冷たく澄んだような寒さを感じた。自分が温かいからこそ、感じる寒さ。寒い寒いと呟く男の顔は楽しそうで、その夜は珍しく枕に頭をつけるや

いなや眠ってしまった。

翌日、無茶が祟って、案の定発熱した。

「翔さまったら、昨日夜になってから散歩するなんて。無茶しすぎだよっ」

娘の叱責に、男は悪戯を見つけた子供のような照れ笑いを浮かべた。

「ホントに何考えてんだか...」

彼女はふくれてみせたが、それでも、昨日帰ったときよりもずっと、男の具合が良さそうなことに気が付いていた。無論昨日より熱は高いし、咳もひどい。だが瞳がいきいきとして、楽しそうに微笑んでいる。

「翔さま、昨夜何かいいことがあったの？」

「ああ」娘の問いに、男は微笑んだまま頷いた。「とってもいいことがあった。熱が下がったら、教えるからな」

男の熱はすぐに下がった。今までにない回復力に、医師は驚いた。男は、娘に聞こえぬよう囁いた。

「桜が咲くのを見られたからです」

それを聞いて、医師の目も楽しげに躍った。

「ほう、なるほどな」

仲間外れになった娘が、不安そうに尋ねてきた。

「何？二人で内緒話？」

すると男は、笑って立ち上がった。

「俺にあったいいことの話だ。今教えるから、おいで」

最終回

そして、男は今度は娘と二人で桜を見上げていた。

「ほんとに、ほんとに桜だね」

娘が嬉しそうに呟いた。花は、昼間見てもやはり小さく、頼りなげな感じだったが、それでもまだ咲いていた。

「翔さまのいいこと。この花が咲いてくれて、ほんとによかった...」

そう言って娘は、男の手にそっと自分の手を滑り込ませた。

「だって咲いてくれなかったら、翔さまどこかへ行っちゃったかもしれないもの」

男もまた、娘の手をそっと握り締め、囁いた。

「心配かけたな...もうどこにも行かない」

二人は顔を見合せて、微笑んだ。

冬はもう、死と共に歩いていない。冬の前には、春がある。桜の咲く、春がいる。自分にもちゃんとやってくるのだ。春が、未来が。

気分が変わるだけですぐに治る病でもないが、男は今

では希望の方を信じていた。故郷から寄越した付添人が着いたら、さぞかしとまどうだろうな、と彼は可笑しくなった。

そうそう、春になったら、故郷に顔を見せに行こう。心配をかけた詫びに。

「翔さま、今日もうちにご飯食べに来てね」

娘が桜の方に顔を向けながら言った。

「このところずっと世話になりっ放しだが、いいのか」

すると、娘は急にまっすぐに男を見つめて言った。

「いいの。翔さまは私の未来のお婿さんなんだもん」

そして、弾けるように笑った。男は、一瞬赤くなってから、微笑み、そして一緒に笑った。

彼は急に空腹を覚えた。—了—

冬桜 — あとがきモドキ—

読者のみなさまご機嫌如何お過ごしでしょうか。最後まで辛抱強く読んでくださって誠にありがとうございました。一人でもいい、読んでくれる方が居てくれれば、書いた甲斐があるというものです。

あらすじで言えば、死にかけの若者がうだうだしてて、ひょんなことで元気になるという、「だからどしたの」な作品です。正直、自分では、小説として成立してるかもよくわかりません。

この話を書いたきっかけは、季節外れの桜を見て衝撃を受けたことでした。そして、自身がお笑いキャラなため美形好きな私の趣味で、肺病美形青年を主人公にしてみました...しかし、いくら好みに沿ってしようが、自分の創作キャラにはときめかないんですよ。書いてる時は、私は翔青年目線気分なわけですから。自分で自分にトキメク筈はないというわけです。

そして、この作品、一番書きたかったのは、最後の一行でした。意味がわかんないとか唐突だと思われた方が大部分かと思われそうですが、まあいいや～。

欠点は多々あり、某コンクールで掠りもしなかった作品ですが(そんなん連載したんかい)、十年近くも温め、愛着があります。口下手な人間が、拙い言葉を繋ぎ合わせ、何かを懸命に伝えているとご理解くださいませ☆
改めてありがとうございました！ 2007年8月31日

2007年6月17日～2007年8月31日連載

ブログ 心想事成に<http://silverwhite.seesaa.net/>

一部編集の都合で行間、行変え等を行っております。
掲載されている本文において、無断転写、借用、二次利用等はお断りしています。印刷やダウンロードは個人で楽しむ限りでお願いします。

All copyrights 蔓庵(kazura-an) since 2006

蔓庵 HP: <http://kazrafugetsu.web.fc2.com/>